

ようこそ畑へ

2011年10月24日(月)・27日(木)

【愛子】

皆さんがお住まいのところの紅葉はどんな様子でしょうか。畑から見える山々は、紅葉の見頃は過ぎてきたように思います。

先週の水、木、金ととても暖かい日で畑の片付けや収穫が色々と進みました。ナス、ピーマン、豆類の支柱をはずして、折れてしまったものを除いて、束にしてひもでくくり、来年も使いやすいようにしてしまっておきます。

じゃがいもの収穫もすべて終わりました。今年はポテトフォークといういも掘り専用のくわを買ったので、夫は掘りやすいといえます。土寄せしてある端にポテトフォークを入れて、土をほぐしていきます。ほぐされた土を手でひと山ひと山崩して、いもを探して掘り進めていきます。メークインと男爵の収量がとても良くなりました。自家採種して、その土地に作物が合うまでに7、8年かかると言われていますが、今年はやっと合ってきたのかなと思うことができました。また、私達も、種いもの大きさや、植え幅など、色々工夫していきたいと思います。地面ばかり見て、土にまみれていて、ふと妙な音が耳に入るとドキリとします。“熊…?”

実は、豊滝は10月に入ってから熊出没情報が連日続いています。子供達を通う小学校では、集団登下校が続いていましたが、先週の半ばから、親の送迎に切り替わりました。早朝に畑に出たり、夕方遅くまで畑にいることは控えています。

9月は、雨、あめ、アメ…、10月は熊、くま、クマ…と思うように畑へ出られません。農家になる前の話ですが、ベテラン農家の方が、言っていたことを思い出します。“農家は毎年一年生だよ。”その言葉が少しわかった気がします。その年、その年天候や状況が異なるので、その中でどうしていけばいいのか、何ができるのか、できないのか考える判断力を養っていかなければ、そして、また、来年も一年生になれるように、これから準備を進めていきたいと思えます。

【固定種と交配種の話】（先週のつづき）

アブラナ科野菜には、伊達家で作っている野菜で言えば、小松菜、水菜、タアサイ、チンゲンサイ、ルッコラ、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、白菜、大根、ラディッシュがあります。アブラナ科野菜は収穫せずにそのまま畑に植えておくとやがて花が咲き種がつきます。アブラナ科野菜は一株に小さな花が沢山つきます。アブラナ科野菜は、一つの花に雄しべと雌しべありますが、自分の花粉では受粉できず、他の株の花粉をもらって種をつけます。

また、他のアブラナ科野菜の花粉をもらっても種をつけることができます。例えば、小松菜とタアサイを近くにまくと、互いに花粉をもらいあって種をつけ、その種を播くと小松菜とタアサイが混じったような野菜ができたりします。

しかし、アブラナ科にはグループがあり、コマツナ、カブ、ハクサイなどのグループ、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワーなどのグループ、大根などのグループに分かれていて、違うグループの野菜の花粉では種をつけることはできません。例えば、大根がキャベツの花粉をもらって種をつけることはできないのです。

アブラナ科の野菜は花一個に対してできる種の数のごくわずかです。カボチャ（ウリ科）のように一つの花（つまり、一つの実）に対して種がたくさんできるものは、手作業で雌しべに花粉をつける交配作業をすると効率よく種を採ることができますが、アブラナ科の野菜はそうはいきません。手作業では膨大な手間がかかります。そこで効率的にアブラナ科の交配種をつくるために、雄性不稔が利用されるようになりました。

まず、葉大根のある品種で雄性不稔株が発見されました。これを他の品種の大根と掛け合わせていくことで、効率よく交配種の大根を作るだけでなく、違うグループの白菜やキャベツ、カブと掛け合わせることで、雄性不稔の性質を大根以外のアブラナ科野菜に取り込んでいくことが行われるようになりました。（つづく。3回の予定でしたが4回になりました。）